

第183回定期演奏会

2021年6月11日(金) 17:45開場 18:45開演

三井住友海上しらかわホール

指揮/松村秀明 サクソフォン/須川展也*

- ・ヒンデミット:弦楽と金管のための協奏音楽Op.50
- ・グラズノフ:アルト・サクソフォンと弦楽オーケストラのための協奏曲変ホ長調Op.109*
- ・チャイコフスキー:交響曲第4番へ短調Op.36



バッハを巡って、時を超える旅 ——、ヴェーベルン、ヴィラ＝ロボス、そしてブラームスの傑作たちをお楽しみいただいている5月定期に続いて、次回・6月11日の第183回定期演奏会は、管楽器の豊かな表現力をもつ味わえる傑作たちを描いております。弦楽器や打楽器の皆さんに失礼とならないよう、「も」というところは強調しておきますが、他の作品に比べて管楽器の活躍が際立つ作品たちであることは、間違いありませんし、そういった作品だからこそ、あらためて問われる弦楽器・打楽器の表現力というものが、より深く感じ取れる嬉しいひとときになるのではないかと思います。

◆明快で、力強く、洪くも深い —— ヒンデミットの魅力

まずは、ドイツの作曲家パウル・ヒンデミット(1895～1963)の作品から。〈弦楽と金管のための協奏音楽〉Op.50(1930年)と、タイトルこそ無愛想ですけど、明快にしてパワフル、色彩も豊かなその内容は、聴けば惹かれること、お約束します。

タイトルの通り、弦楽セクションと金管セクションだけで、間に座るはずの木管楽器群や、後ろの打楽器群がない作品です。木管楽器のまろやかさや厚みのある色彩感を排して、打楽器のサウンドも入れないかわりに、金管セクションがそのぶん大活躍。華やかでもあり、輝きも豊かさも、ぶ厚くもたっぷりホールを包むサウンドも……金管楽器群の魅力が、いつも以上に迫ってくるのはもちろん、弦楽セクションも幅広い表現力を(ときにきびきびと美しく、ときにうっとり、はたまた研ぎ澄まされたように……)披露します。

ヒンデミット自身は、世界的なヴァイオリン奏者としても活躍したほどの弦楽器奏者でしたが、さまざまな管楽器も自在に吹けたそうで、彼の作品では、無駄なく無理なく(しかし演奏家の挑戦心を存分に刺激する)楽器の生かし方が、実に心にくい限り。

明快な楽想に、洪くも深い色彩感と、リズムの生命力を見事に発揮したヒンデミットの傑作 —— 実は、アメリカの名門オーケストラ、ボストン交響楽団の創立50周年を記念して書かれた作品です。凄腕オーケストラのために作曲されただけに、作品が求める表現力も容赦なく、セントラル愛知響が磨いてきた親密なアンサンブル能力を、あらためて堪能できるかと思しますのでお楽しみに。

◆艶の深さと、歌心の美しい昇華 —— サクソフォンの名匠・須川展也登場!

続いては、金管楽器のボディを持ちながら、吹き口は木管楽器のマウスピースという(両方の良さを兼ね備えた!)楽器、サクソフォンの魅力をたっぷり味わっていただけるコンチェルトを。

ロシアの作曲家、アレクサンドル・グラズノフ(1865～1936)が最晩年に残した名品〈アルト・サクソフォンと弦楽オーケストラのための協奏曲 変ホ長調〉(1934年)です。

グラズノフは、チャイコフスキーの次世代にあたる作曲家で、ロシア情緒をたっぷり響かせる交響曲の数々や、《ライモンダ》など壮麗なバレエ音楽など、豊かな才能を発揮したひと。オーケストラ書法の巧みさでは、偉大な先人チャイコフスキーをしのぐ腕前をみせた才能ですが、次回定期でお聴きいただく〈サクソフォン協奏曲〉で共演するオーケストラは、弦楽セクションのみ。しなやかで確かな厚みをもって歌う弦の響きが、柔らかくも艶の美しいサクソフォンの色彩を、支えつつぐっとひきたてます。

サクソフォンという楽器は、発明されたフランスでは早くから使われていましたが、他の国へ普及してゆくのはずっとあと

のこと。ロシアの作曲家でサクソフォンを使ったのは、このグラズノフがかなり初期の例ではないかと思いますが、晩年の彼がフランスはパリで暮らしていたとき、素晴らしいサクソフォン奏者に出逢ったことがきっかけで書かれた作品といえますから、やはり名手の存在あってこそ、作曲家の靈感はふるいたつのでしょう。

次回定期でソリストにお迎えする須川展也さんも、その斬れ味見事で色気にも溢れた、深い音楽を親密に聴かせる世界的プレイヤーとして、現代の作曲家たちを大いに刺激してきました(須川さんのために書かれた新作は、ソロ曲からコンチェルトまで多数)。

その須川さん、サクソフォンの古典的な名作も長年にわたって磨きこみ、この楽器がもつ可能性をもっとも美しい地平へと拓いてきました。後進のサクソフォン奏者たちへ与えてきた影響も大きいこの名匠をお迎えすることで、オーケストラとの〈音楽を愉しみぬく〉その時間を、堪能できるかと思えます。ご期待を。

◆運命、哀愁、愉悦、爆発 —— チャイコフスキーの壮麗な疾走

そして最後は、ロシアの作曲家ピョートル・チャイコフスキー(1840～93)の力作〈交響曲第4番へ短調〉Op.36(1877～78年)。

管楽器はもちろん、弦楽器だって大活躍の作品ですけど、なにしろ冒頭で強烈なインパクトを叩き込む、運命の主題のようなファンファーレ(管楽器だけで奏されます)からして、この圧倒的な迫力こそ管楽器の凄さと思ってしまうのです。

と言いながら、すぐに入ってくる弦楽器の、濡れた瞳を伏せたような哀しくも美しい歌の凄みに、いや弦の表現力よ……とあらためて感動もするわけで、チャイコフスキーのシンプルながら効果的なオーケストラ書法のなかに繰り広げられる、全セクションの豊かな〈歌〉を、ずっしりとしたサウンドの厚みを感じながら、全身で感じていただきたいと思えます。

ときに激して、ときに影へ身を沈め、と起伏をたどりながらもひたすらに悲劇の波を打ちつけてくる第1楽章につづいて、第2楽章では、哀愁の色濃いメロディを深々と歌いついでゆく、管楽器・弦楽器それぞれの〈歌心〉が絶品。続く第3楽章のスケルツォでは、珍しいことに弦楽セクションがずっと〈ピツィカート奏法〉(弓を持たず、指で弦をはじいて音を出す)で急速なパッセージを奏し続けるという、聴くほうには嬉しい(弾くがわにとってはなかなか大変な)光景も。そんな苦労をよそに入ってくる管楽器の、なんとも面白い表現にもご注目ですが……最後の第4楽章、ホールの天井も揺れるかというフルオーケストラ群の壮麗な爆発は、やはり生演奏で空気感まるごと体感してしまうと、また聴きたいと思ってしまうもの。

総員それぞれ火の玉のように疾走するこのフィナーレ、民謡風の味わいもそなえた愛らしいメロディにも溢れつつ、強烈なパワーにどれだけ豊かな表現を、的確にピントを合わせて響かせるか……互いを良く知る親密なオーケストラならではのアンサンブル力が試されるのはもちろん、指揮者の力量も重要です。次回定期でお迎えする若きマエストロ——全国のオーケストラから招かれてその覇気を魅せてきた松村秀明さんが、このプログラムだからこそ引き出してみせるセントラル愛知響の底力……ぜひご期待ください。

ところで、このチャイコフスキーの〈交響曲第4番〉、全員がフルパワーで走りきるフィナーレの最後の最後、長く伸ばされる壮大な最強音なのに、(サウンドの色あいの都合上)音を出さずに待たされるというプレイヤーが3人だけいます。さて、どのパートがこの最後の音だけを出さずに我慢させられるのか……正解は、来月このホールでご覧ください(いや、そこに気をとられてしまうのもつたいないので、気づいたかただけ、その「沈黙」の大切さにもエールを贈ってさしあげてください)。

やまの たけひろ

山野雄大

ライター[音楽・舞踊評論]。『音楽の友』『レコード芸術』『バンドジャーナル』各誌をはじめ雑誌・新聞への寄稿、テレビ・ラジオ番組での解説、CDライナーノート・企画構成、オーケストラやバレエ公演の演目解説、取材撮影など多数。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》司会・構成。

Profile

